

[B年] 公現後第7主日(2022年2月20日)**【旧約聖書日課】列王記下 4章18～37節**

¹⁸その子は大きくなったが、ある日刈り入れをする人々と共にいた父のところに行ったとき、¹⁹「頭が、頭が」と言った。父が従者に、「この子を母親のところ抱いて行ってくれ」と言ったので、²⁰従者はその子を母親のところ抱いて行った。その子は母の膝の上でじっとしていたが、昼ごろ死んでしまった。²¹彼女は上って行って神の人の寝台にその子を横たえ、戸を閉めて出て来た。²²それから夫を呼び、「従者一人と雌ろば一頭をわたしのために出してください。神の人のもとに急いで行って、すぐに戻って来ます」と言った。²³夫は、「どうして、今日その人のもとに行くのか。新月でも安息日でもないのに」と言ったが、「行って参ります」と彼女は言い、²⁴雌ろばに鞍を置き、従者に、「手綱を引いて進んで行きなさい。わたしが命じないかぎり進むのをやめてはいけません」と命じた。²⁵こうして彼女は出かけ、カルメル山にいる神の人のもとに来た。神の人は遠くから彼女を見て、従者ゲハジに言った。「見よ、あのシュネムの婦人だ。²⁶すぐに走って行って彼女を迎え、『お変わりありませんか、御主人はお変わりありませんか。お子さんはお変わりありませんか』と挨拶しなさい。」彼女は、「変わりはありません」と答えたが、²⁷山の上にいる神の人のもとに来て、その足にすがりついた。ゲハジは近寄って引き離そうとしたが、神の人は言った。「そのままにしておきなさい。彼女はひどく苦しんでいる。主はそれをわたしに隠して知らされなかったのだ。」²⁸すると彼女は言った。「わたしがあなたに子供を求めたことがありますか。わたしを欺かないでくださいと申し上げたではありませんか。」²⁹そこでエリシャはゲハジに命じた。「腰に帯を締め、わたしの杖を手に持って行きなさい。だれかに会っても挨拶してはならない。まただれかが挨拶しても答えてはならない。お前はわたしの杖をその子供の顔の上に置きなさい。」³⁰その子供の母親が、「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしは決してあなたを離れません」と言ったので、エリシャは立ち上がり、彼女の後について行った。³¹ゲハジは二人より先に行って、杖をその子供の顔の上に置いたが、声も出さず、何の反応も示さなかったので、引き返してエリシャに会い、「子供は目を覚ましませんでした」と告げた。³²エリシャが家に着いてみると、彼の寝台に子供は死んで横たわっていた。³³彼は中に入って戸を閉じ、二人だけになって主に祈った。³⁴そしてエリシャは寝台に上がって、子供の上に伏し、自分の口を子供の口に、目を子供の目に、手を子供の手に重ねてかがみ込むと、子供の体は

暖かくなった。³⁵彼は起き上がり、家の中をあちこち歩き回ってから、再び寝台に上がって子供の上にかがみ込むと、子供は七回くしゃみをして目を開いた。³⁶エリシャはゲハジを呼び、「あのシュネムの婦人を呼びなさい」と言った。ゲハジに呼ばれて彼女がエリシャのもとに来ると、エリシャは、「あなたの子を受け取りなさい」と言った。³⁷彼女は近づいてエリシャの足もとに身をかがめ、地にひれ伏し、自分の子供を受け取って出て行った。

【使徒書日課】ヤコブの手紙 5章13～16節

¹³あなたがたの中で苦しんでいる人は、祈りなさい。喜んでいる人は、賛美の歌をうたいなさい。¹⁴あなたがたの中で病気の人は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。¹⁵信仰に基づく祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます。その人が罪を犯したのであれば、主が赦してくださいます。¹⁶だから、主にいやしていただくために、罪を告白し合い、互いのために祈りなさい。正しい人の祈りは、大きな力があり、効果をもたらします。

【福音書日課】マルコによる福音書 2章1～12節

¹数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、²大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、³四人の男が中風の人を運んで来た。⁴しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかったので、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。⁵イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。⁶ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれと考えた。⁷「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」⁸イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。⁹中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。¹⁰人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に言われた。¹¹「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」¹²その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆の見ている前を出て行った。人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない」と言って、神を賛美した。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

列王記下 4章18～37節

18男の子は成長し、ある日、父親や刈り入れをする人のもとへ出かけた。19ところがその時、父親に、「頭が、頭が」と叫んだので、父親は若者に、「この子を母親のところへ抱いて行け」と言った。20若者はその子を抱いて、母親のところ連れて行った。その子は昼まで母親の膝で休んでいたが、死んでしまった。21彼女は上って行って、神の人の寝台にその子を横たえ、戸を閉めて出て来た。22そして夫を呼んで言った。「どうか私のために、若者一人と唯ろば一頭を出してください。神の人のところに急いで行って、すぐ戻って来ますから。」23夫は、「どうして、今日その人のところに行くのか。新月祭でも安息日でもないのに」と言ったが、「ご心配なく」と彼女は答え、24唯ろばに鞍を置き、若者に言った。「手綱を引いて進んで行きなさい。私が止めないかぎり、手綱を緩めてはなりません。」25こうして彼女は、カルメル山にいる神の人のもとにやって来た。神の人は遠くから彼女を見ると、従者ゲハジに言った。「見なさい。あのシュネムの女だ。26さあ今すぐ、走って行って彼女を迎え、『変わりありませんか、あなたの夫は変わりありませんか。子どもは変わりありませんか』と尋ねなさい。」彼女は、「変わりはありません」と答えたが、27山にいる神の人のもとに来ると、その足にすがりついた。ゲハジは引き離そうと近寄ったが、神の人は言った。「そのまましておきなさい。彼女は苦しい思いをしているのだ。主はそのことを私に隠し、知らされなかった。」28彼女は言った。「私はご主人様に子どもを求めたでしょうか。欺かないでくださいと申し上げたではありませんか。」

29エリシャはゲハジに言った。「腰に帯を締め、私の杖を手を持って行きなさい。誰かに会っても挨拶してはならない。誰かが挨拶しても答えてはならない。そして、私の杖を子どもの顔の上に置きなさい。」30ところが、子どもの母親が、「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。私はあなたを離れません」と言ったので、エリシャは立ち上がり、彼女の後について行った。31ゲハジは彼らより先に行って、杖を子どもの顔の上に置いたが、声もなく反応もなかった。そこでゲハジは引き返し、エリシャと会って、「子どもは目を覚ましませんでした」と報告した。32エリシャが家に着いてみると、子どもは死んで、寝台の上に横たわっていた。33彼は中に入って戸を閉め、二人だけになって主に祈った。34そして寝台に上がって子どもの上に身を伏せ、自分の口をその口に、目をその目に、手をその手に重ねてかがみ込むと、

子どもの体は暖かくなった。35それから彼はまた起き上がり、家の中をあちこち歩き回り、再び寝台に上ってかがみ込んだ。すると、子どもは七回くしゃみをして、目を開いた。36エリシャはゲハジを呼び、「あのシュネムの女を呼びなさい」と言った。ゲハジが呼ぶと、彼女がやって来たので、エリシャは、「子どもを抱きなさい」と言った。37彼女は来て、エリシャの足元に身をかがめ、地にひれ伏し、子どもを抱いて出て行った。

ヤコブの手紙 5章13～16節

13あなたがたの中に苦しんでいる人があれば、祈りなさい。喜んでいる人があれば、賛美の歌を歌いなさい。14あなたがたの中に病気の人があれば、教会の長老たちを招き、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。15信仰による祈りは、弱っている人を救い、主はその人を起き上がらせてくださいます。その人が罪を犯しているのであれば、主は赦してください。16それゆえ、癒されるように、互いに罪を告白し、互いのために祈りなさい。正しい人の執り成しは、大いに力があり、効果があります。

マルコによる福音書 2章1～12節

1数日の後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡った。2大勢の人が集まったので、戸口の辺りまで全く隙間もないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、3四人の男が体の麻痺した人を担いで、イエスのところへ運んで来た。4しかし、大勢の人がいて、御もとに連れて行くことができなかったので、イエスがおられる辺りの屋根を剥がして穴を開け、病人〔直訳→体の麻痺した人〕が寝ている床をつり降ろした。5イエスは彼らの信仰を見て、その病人に、「子よ、あなたの罪は赦された」と言われた。6ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中で考えた。7「この人は、なぜあんなことを言うのか。神を冒瀆している。罪を赦すことができるのは、神おひとりだ。」8イエスは、彼らが考えていることを、ご自分の霊ですぐに見抜いて、言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。9この人〔直訳→体の麻痺した人〕に『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。10人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、体の麻痺した人に言われた。11「あなたに言う。起きて床を担ぎ、家に帰りなさい。」12すると、その人は起きて、すぐに床を担いで、皆の見ている前を出て行った。人々は皆驚嘆し、「このようなことは、今まで見たことがない」と言って、神を崇めた。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・2月20日「公現後第7主日」の日課主題は「いやすキリスト」。各日課が「病人・死者のいやし」に関連する箇所から選ばれている。

・旧約日課は、「列王記下」から、預言者エリシャの奇跡伝承の一つ、「シュネムの婦人の子を生き返らせる」逸話の箇所。使徒書日課は、「ヤコブの手紙」から、祈りの共同体としての教会の営みを教える箇所。福音書日課は、「中部の人をいやす」逸話の箇所から。

旧約日課(列王下4章より)

・「列王記」は、ユダヤ教正典「前の預言者」の最後に置かれた「イスラエル王国史記」で、「ヨシュア記」から始まるイスラエルのカナン定住時代を描く「正史」の最後に位置する。上下巻に分けられているが、便宜上分割されているもので、元来一卷本の文書である。

・「列王記(上・下)」を特徴づけるのは、王国史における預言者の果たした役割の強調である。殊に重要な預言者として描かれるのが、北王国を背景に登場する「エリヤ」と「エリシャ」、南王国の宮廷預言者として登場する「イザヤ」である。「エリヤ」は半ば伝説上の人物として取り上げられ、北王国政治に決定的な影響を与えたようには描かれていない。それに対して、「エリシャ」は、「エリヤ」の正当な後継者として取り上げられながら、「エリヤ」とは大きく異なる「預言者集団」を背景に持つ「宗教的権力者」として登場し、実際に北王国の王朝交代(オムリ王朝に対する軍司令官イエフのクーデターと新王朝樹立)の立役者として描かれている。「エリシャ」は、オムリ王朝時代に北王国領域各地の「聖所」で地方権力として存在していた「祭司・預言者集団」を束ねることによって、「地方豪族」を軍司令官イエフのもとに集結させ、オムリ王朝の打倒と新しいイエフ王朝の正統性を承認させたものと推察される。

・「預言者エリシャ」の物語の多くの部分は、王宮で編纂される「預言者の書」等の記録資料に基づくのではなく、民間伝承された逸話資料に基づくと考えられる。これは「預言者エリヤ」の場合と同様で、物語に含まれる逸話は、必ずしも時系列に即して配列されていない。おそらく、各地で伝えられていた逸話がどこかの時点で「エリシャ伝承集」としてまとめられ、資料として用いられるものになったと考えられる。日課箇所は、そのような「預言者エリシャの奇跡伝承集」の中に含まれていたと考えられる逸話の一つである。王下4:1~6:7にはエリシャが起こした奇跡の逸話が六つ並べて置かれているが、資料とした「奇跡伝承集」に拠るものと推察される。

・日課箇所は、「シュネムの婦人の子を生き返らせる逸話」としてまとめを持つが、これはより大きな「シュネムの婦人にまつわる逸話」の中の一部である。この「逸話」全体は、4:8~37および8:1~6にわたる。

・エリシャがシュネムの婦人の子を生き返らせた奇跡伝承は、「エリヤ伝承」にある同様の奇跡と酷似した描き方がされており(王上17:17~24)、伝承過程において相互に影響を受けた結果と考えられる。「旧約」中に「死者を生き返らせる奇跡」として明確に描かれる逸話はこの二人の預言者の例のみである。「新約」中の同様の逸話物語(「主イエスがヤイロの娘を生き返らせた逸話」、「主イエスがナインでやもめの一人息子を生き返らせた逸話」、「主イエスがラザロを生き返らせた逸話」、「ペトロがタビタ=ドルカスを生き返らせた逸話」、「パウロが青年エウティコを生き返らせた逸話」)には、これらの預言者の逸話物語の影響がみられる。

・「エリシャ物語」には「従者ゲハジ」が繰り返し登場するが、特に「シュネムの婦人にまつわる逸話」では一貫して重要な脇役を演じている。この人物の詳細は知られていないが、ユダヤ教のラビ伝承(ミシュナ、タルムード)では、聖書外の伝承(口伝)に基づいて彼を「道を踏み外した弟子」と否定的に教えている。

使徒書日課(ヤコブ5章より)

・「ヤコブの手紙」は、新約正典中「公同書簡」に分類されてきた使徒文書であるが、執筆者は使徒の中の「ヤコブ」ではなく、「主の兄弟ヤコブ」として知られる人物であるとされている。「主の兄弟ヤコブ」については、「使徒言行録」や「パウロ書簡」の中で繰り返し言及がある。原始エルサレム教会で、最初からの古参信者らと新参のディアスポラ系「ギリシア語を話すユダヤ人」信者との間に対立が生じ、後者がエルサレムを離れて行った後、使徒たちが世界各地に形成されたディアスポラ系「教会」との関係維持のために駆け回るようになると、留守をあずかる形でエルサレム教会の柱の役割を担うようになったと考えられる(もちろん、彼が主イエスの実弟であったことも、古参信者グループにとっては大きな信頼を寄せる理由だったと考えられる)。本書簡の主張する言説が、表面的には「パウロ書簡」で主張されている言説と矛盾あるいは対立しているように見えることも、本書簡の著者が「主の兄弟ヤコブ」であるとされる根拠となっている。ただし、教えの内容は、「マタイ福音書」が「山上の説教」などで強調して伝えている内容に近く、本書簡を「反パウロのユダヤ主義信者の著作」と断ずることはできない。

・日課箇所14節は、古代教会で「終油(現在では「病者のための塗油」)」の秘跡として儀式化された営みの根拠となっている。これを秘跡(サクラメント・聖礼典)から除外したプロテスタント教会でも、実質的に「病者訪問の祈り」として一定の儀式を伴う形式を継承している(たとえば、「終油」に続いて行われる聖体拝領に相当するものとして、病床聖餐は広く行われてきた)。一方、教派によっては、続く16節の「罪を告白し合い」を一連の病者訪問の中に位置づけ、死期を迎えた信者に悔い改めを促し罪を告白させるという習慣もある。

福音書日課(マルコ 2 章より)

・日課箇所は、「中風の人(の癒し)」の逸話の箇所。主イエスの初期のカファルナウムを拠点とした活動をまとめた中に置かれ、共観福音書が共通に伝えている。前段「重い皮膚病の人をいやす」および後段「レビ(マタイ)を弟子にする」と共に一つの枠を構成している(「マタイ福音書」ではこの三段が連続して置かれていないが、「山上の説教」を先行させた結果、場面設定の展開に手を加えたためと考えられる)。

・「中風の人(パラリュティコス)」は、「過度に弛める(パラリュオー)」を人称化した語で表現された「半身不随状態の人」のこと。実際にどのような病状の者を指しているのかは特定され得ない。現代医学で脳卒中による半身不随を指す用語「中風」を用いて訳されてきたが、「聖書協会共同訳」では「体の麻痺した人」と訳している。

・この中風の人を運んできた者たちを、「マルコ福音書」は「四人の男」として伝えている(マタイ、ルカと比較せよ)。ただし、「四人の男が…運んできた」の直訳は、「四つで(ヒュポ・テッサロン)持ち上げられて」。「マルコ福音書」は、主イエスの「小黙示録」を伝える中で「選ばれた人たちを四方から(エク・トン・テッサロン)呼び集める」という御言葉を伝えており、この伏線として「四」を意図して用いた可能性もある。

・「律法学者(グランマテウス)」は、すでに 1:22 で「律法学者のようにではなく、権威あるものとしてお教えになった」と、主イエスのあり方と対照的な存在として取り上げられていたが、ここから、実際に主イエスと敵対する者たちとして描かれていく。「グランマテウス」は、「書く」を意味する「グラフォー」から派生した語で、「書記官」などの意味でも用いられる。「新約」では、「書かれたもの」を意味する「グラフェー」がもっぱら「聖書」を指して用いられており、「グランマテウス」も「聖書」に関する専門家の意味で用いられている。

・律法学者との間で議論となったとされているのは、「罪を赦す権威」の所在についてであり、「神のみ」にあるはずの「権威」を主イエスも所持されているということを示す論拠として、中風の人(の癒し)が起き上がらされている。この一連の描写で、二点、着目しておく。

①主イエスは、律法学者がそこに居なければ、中風の人に対して「あなたの罪は赦される」とだけ告げておしまいにされたのだろうか。

②この場面は、律法学者らとの議論とみなされているが、実際の描写では律法学者らは発言しておらず、主イエスが「あなたがたはこう考えている」と一方的に指摘されているのみである。律法学者の疑念を、主イエス自身が顕在化させてみせた結果、対立を呼び寄せたとすると、それは何のためか。あるいは、主イエス自身が、敢えて「罪を赦す権威」を問題として設定し、自身の活動の意図を示そうとした、ということなのだろうか。

来週の誕生日 (2月20日~26日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-11 番「感謝に満ちて」(= I-2「いざやともに」)は、17世紀ドイツの歌手で牧師のマルティン・リンクルトの作詞作曲。1630年ごろ自らの子らのために食卓の感謝の歌として作ったが、著名な讃美歌作家クリューガーに見いだされて讃美歌集「歌による敬虔の訓練」(1647年発行)に収録され有名になった。バッハやメンデルスゾーンが自曲に用いている。
- ・21-490 番「かみさまに感謝」は、『こどもさんびか2』(1983年版)の編集作業の中で、編集委員で当時左内坂教会牧師の花房泉一が作詞した歌詞に、同じく編集委員で作曲家の阿佐ヶ谷教員・小山章三が曲をつけて同歌集の1番に置かれた。
- ・21-390 番「主は教会の基となり」は、19世紀英国教会司祭 S.J.ストーンが牧会教育上の必要から信仰告白「教会はキリストの体にして、恵みにより召されたる者の集い」に焦点を当てて作詞。曲は、C.ウェスレーの孫で19世紀英国教会のオルガニストとして活躍したサミュエル・S・ウェスレー(チャールズ・ウェスレーの孫)が「黄金の都エルサレム(Jerusalem the Golden / Urbs Sion aurea)」の歌詞に合わせて作曲したもの。21-101 番も同曲。

21-11「感謝にみちて」

Nun danket alle Gott

1. Nun danket alle Gott, / Mit Herzen, Mund und Händen, / Der große Dinge thut / An uns und allen Enden, / Der uns vom Mutterleib / Und Kindesbeinen an / Unzählig viel zu gut, / Und noch jetzt und gethan.
2. Der ewig reiche Gott / Woll' uns bei unserm Leben, / Ein immer fröhlich's Herz / Und edlen Frieden geben, / Und uns in seiner Gnad' / Erhalten fort und fort, / Und uns aus aller Noth / Erlösen hier und dort.
3. Lob, Ehr' und Preis sei Gott / Dem Vater und dem Sohne, / Und dem, der beiden gleich / Im hohen Himmelsthron, / Dem dreieinigen Gott, / Als es im Anfang war, / Und ist und bleiben wird / Jetzt und immerdar.

21-390「主は教会の基となり」

The Church's one foundation

1. The Church's one foundation / Is Jesus Christ, her Lord; / She is his new creation / By water and the Word. / From heav'n He came and sought her / To be his holy bride; / With his own blood he bought her, / And for her life he died.
2. Elect from every nation, / Yet one o'er all the earth; / Her charter of salvation: / One Lord, one faith, one birth. / One holy name she blesses, / Partakes one holy food, / And to one hope she presses / With ev'ry grace endued.
3. Through toil and tribulation / And tumult of her war / She waits the consummation / Of peace forevermore / Till with the vision glorious / Her longing eyes are blest, / And the great Church victorious / Shall be the Church at rest.
4. Yet she on earth has union / With God, the Three in One, / And mystic sweet communion / With those whose rest is won. / O blessed heav'nly chorus! / Lord, save us by your grace / That we, like saints before us, / May see you face to face.